

# 『初恋の遺産』

金田 萌

へあらすじへ

フランス人形のアンジュは自分の髪を綺麗にしてくれた美容師アシスタントの河合春人に恋をする。彼のそばにいたいアンジュは、自分の能力を使い、髪が伸びる呪いの人形を演じることに。河合は何度でも髪が生えてくる都合のいいアンジュをカットの練習台として使い始める。

へ概要へ

人形視点の切ない恋の物語。  
呪いの人形×ラブストーリーという斬新な組み合わせが魅力です。

本編文字数：5917字

想定尺：：：20分

登場人物

アンジュ フランス人形。女の子。

河合春人(21) 美容師アシスタント。

関沼由衣(20) 河合の彼女。

森田彰(21) 河合の親友。

ルイス フランス人形。男の子。

風間洋介(50) アンティークショップ店主。

○ アンテイクショップ（タ）

ショーウィンドーにフランス人形のアンジュとルイスが並んで座っている。

アンジュはブロンドのボブヘア。

アンジュ「私ね、お姫様のような長い巻き髪がとてもお気に入りで買ったの。初めて私を買った少女がよく褒めてくれたから。けど、その髪は彼にバツサリと切られてしまった。最低：：そう思った時、彼が鏡越しに私を見ながら言ったの。『かわいい』って。それがとても嬉しかった。私はずっと欲しい言葉だったから」

ルイス「アンジュは彼のことを好きだったの？」

アンジュ「：：今だって好きだよ。離れたくない。なんてない。でもこれは仕方ないことなの」

○ 道（タ）

バイクに乗っている河合春人（21）。どこか悲しげな表情。

アンジュ声「私は人形で、彼は人間だから」

○ アンテイクショップ（タ）

ルイス「ねえ、もっと聞かせてよ。アンジュがどんな恋をして、どうしてここへ来たのか」

アンジュ「そうね……。じゃあまず、私と彼の出会いからお話しするわ。彼の名前はね、河合春人」

○ 河合のアパート・玄関外（三か月前）

ビニール袋を持った森田彰（ニ）がチャイムを鳴らす。

ドアが開いて河合が出てくる。

河合「アツくん」

森田「よっ！ 悪いな突然押しかけて」

河合「（袋を見て）もしかして宅飲みしようつて？」

森田「残念。それはまた今度な。今日は親友にちよつとお願いがあつて。これが美容師

の君にしかな頼めないことなんだよ」

河合「えっ、俺まだアシスタントだけど大丈夫？」

森田「もちろん。むしろ好都合。普段マネキンでカットの練習してんだろ？ 同じような感じでこいつも頼めないかなって」

森田、袋から薄汚れたアンジュを出す。  
ブロンドの長い髪が絡まり顔が隠れている。

河合「フランス人形？」

森田「うちの倉庫から出てきたんだよ。きたねーだろ？ でも物はいいいからアンティークショップで売ったら金になるって爺ちゃんが言ってた」

河合「……この子の髪を整えろと？」

森田「練習だと思ってさ」

河合「なんの？ こんな状態の客来ないから」

森田「いつか来るかもしれないねーじゃん」

河合、じっとアンジュを見つめる。

河合「……わかった。やるよ」

森田「マジで？」

河合「面倒だけど、この髪のまま放置はない  
な―って。アツくんができないなら俺がや  
るしかないな―って」

森田「ありがとう親友！」

○ 同・中

整理整頓された1Kの部屋。一角に練習  
用のマネキンとスタンドミラーがある。  
袋から汚れたアンジュを出す河合。  
ボウルにお湯を張って人形の髪を浸す。  
そして手で優しく髪をほぐしていく。

× × ×  
スタンドミラーの前に置かれた椅子。  
アンジュを座らせドライヤーをかける。

× × ×  
河合がヘアアイロンをかけ終える。

河合「よし」

河合がサラサラになった髪を触りながら  
満足げに微笑む。しかし鏡に映る汚れた

ドレスが気になり顔を曇らせる。

× × ×

ドレスを脱がし、ボウルに張ったお湯で  
手洗い。

× × ×

ドレスをドライヤーで乾かす。

× × ×

アンジュの体を濡れたタオルで拭く。

× × ×

ドレスを着たアンジュが椅子に座ってい  
る。鏡越しに見つめる河合。首をひねる。

ハンカチをカットクロスのようにしてア  
ンジュに巻く。

河合 「お客様、似合わせカットでいきましょ  
う」

ハサミを握る。

× × ×

ボブヘアになったアンジュ。

河合がヘアアイロンをかけ終える。

河合 「よし」

カットクロスを外し、鏡越しに見つめる。

河合「うん、かわいい」

河合、満足げに微笑むと片づけを始める。

アンジュN「私は春人を魔法使いだと思った。汚い、醜いと捨てられてきた私をこんなにも美しく生まれ変わらせてくれたから。髪を切られた時はショックだったけど、彼が微笑んでくれた時思ったの。短い髪もそんなに悪くないじゃんってね」

河合が紙袋を持って戻ってくる。

アンジュを紙袋に入れ、隅に置く。

アンジュN「ふと欲が出た。また髪を切ってもらいたいって。あの時の感動と幸せが永遠に続けばいいのにつて」

○ 森田の家・玄関外（翌日）

森田が玄関のドアを開けると、紙袋を手にした河合が立っている。

森田「よっ！ さすが仕事が早いな春人は。

ほんとに助かった。ありがとな」

河合「……あの、それがさ」

森田「ん？」

河合、紙袋からアンジュを出して渡す。  
ボブヘア―だったはずがロングヘア―に  
戻っている。

森田「おー！ いい感じじゃん」

神妙な顔で押し黙る河合。

森田「え？ 何？」

河合「今日、ほんとにはアツくんに謝るつもり  
で来たんだ。髪、俺の好みでボブにしちつ  
て」

森田「ん？ ボブ？ どこが？」

河合「間違いなく切ったよ。証拠もある」

河合、ポリ袋を出す。中に入っていたブ  
ロングの髪の毛を一掴みして森田に見  
せる。

森田「……いやいやいや、嘘つくくなって。あ  
れだろ？ 俺をビビらせようって魂胆だ  
ろ？ その手にはのらないからな！」

森田が河合の真剣な顔を見る。

河合「俺だって最初は信じられなかった。でも全部ほんとのことなんだよ。それ、髪が伸びる呪いの人形なんだと思う」

思わず人形を手放す森田。  
アンジュが地面に落ちる。

森田「気持ち悪っ。え、無理。俺そういうのほんと無理。どうしよう。こいつどうしたらいい？　ってか触っちゃったけど大丈夫か？　一旦手洗ってきた方がいいよな？」

パニックの森田。河合が肩を掴む。

河合「アツくん、落ち着いて」

森田が落ち着きを取り戻す。

森田「……すまん」

河合「……あのさ、もし処分に困りそうなら……この人形、俺が貰っていい？」

森田「は？　あいや、俺はむしろありがたいんだけど、なんで？　これ絶対ヤバイやつだろ」

河合が人形を拾って汚れをはらう。

河合「練習用のマネキンが高くてさ。切っても髪が伸びてくれる人形があったら嬉しいなって」

森田「……マジか」

○ 河合のアパート・中

河合がアンジュの長い髪をボブにカット。  
アンジュN「それから、私と春人の生活が始まった」

○ 同・同（朝）

寝起きの河合が椅子に座っているアンジュのもとへ行き、長い髪に触れる。

○ 同・同（夜）

河合がアンジュの長い髪をボブにカット。  
アンジュN「春人は仕事から帰ると私の髪をカットしてくれる」

河合「よし、今日もかわいい」

○ 同・同（夜）（数日後）

河合がアンジュの髪を切っている。

アンジュN「一週間ほど経つと、彼は私に喋りかけるようになった。まるでヘアサロンのお客さんと話すみたいに」

河合「今日から君をアンジュと呼ぼう。フランス語で『天使』を意味するんだって」  
アンジュN「嬉しかった。好きな人からもらった初めての名前」

○ 同・同（夜）（数日後）

河合がアンジュの髪を切っている。

河合「今日見ちゃったんだ。バイクに乗った先輩の彼氏が店の前を通りかかったんだけど、先輩と目を合わせるとランプを五回点滅させたんだよ。『愛してる』って意味なんだろうけどさ、本当にやってるやつ初めて見て、思わず笑っちゃった」

アンジュN「私は彼よりも長く生きてるから『愛してる』の意味を知ってる。でも、こ

のお飾りの口は動かない。悲しいけれど、私の思いが彼に届くことはない。でもね、それでもいいの。私は多くを望まない。ただ春人のそばにいらればそれだけでいいから」

○ 同・同（夜）（二週間後）

アンジュN「ひと月が経ったある日、女性がやって来た」

河合が関沼由衣（20）の髪をカットする。カットが終わると優しく髪に触れる。

河合「うん、かわいい」

由衣「ありがとう」

河合が由衣の唇に軽くキスをする。

部屋の隅に長い髪のアンジュがいる。

アンジュN「その人は春人の彼女だった。彼の『かわいい』という言葉は、私だけの特別なにかじやなかった」

由衣がアンジュに気付く。

由衣「ねえ春人、あれどうしたの？」

河合「あー、アツくんから貰ったんだ」

由衣「えー何それ。由衣、人形苦手かも。なんか不気味じゃない？」

河合「……由衣が苦手なら片付けるよ」

アンジュN「守ってくれると思ったのに。春人は、私を真っ暗な押し入れに閉じ込めた」

河合が押し入れにアンジュを入れる。

由衣「ねー春人。由衣たちもうそろ同棲しない？」

アンジュN「幸せな時間が崩れ去る。そんな予感がした。嫌だ、絶対に。春人はあなたに渡さない。これからも私と暮らすの！」

部屋の明かりが消えて真っ暗になる。

由衣「きゃっ！ 何！？」

河合「停電？」

部屋の明かりがつく。

由衣「……ビックリした」

照明がチカチカと点滅を始める。

由衣「え、え、え、何？」

由衣が河合の腕にしがみつく。

照明を見つめて固まる二人。

しばらくすると点滅がおさまる。

河合「……なんだ？」

由衣「ねえ、静かなの怖いからテレビつけてもいい？」

河合「うん」

河合がリモコンを手に取ろうとした時、  
チャイムが鳴る。

玄関を振り向く二人。

由衣「……鳴ってるよ」

河合「こんな時間におかしくない？」

時計は午後十一時。

チャイムが連打される。

怯える由衣が河合にしがみつく。

由衣「春人！　なんとかしてよ！」

チャイムが鳴り止む。

河合「……ここで待ってて」

河合が玄関へ向かい、恐る恐るドアスコ  
ップを覗く。外には誰もいない。  
振り返って由衣を見ると首を横に振る。

由衣「ねえ、これ絶対ヤバイよ。明日、一緒に警察に相談しにいきましょう」

と、突然ラップ音が鳴る。

由衣、荷物をまとめ始める。

由衣「もう無理。帰る。こんなところ泊まれない」

河合「ごめん。駅まで送るよ」

由衣が洗面所の化粧品やトイレの生理用ナプキンを鞆にしまう。

由衣「いつもこうなの？」

河合「いや、こんなこと初めてだよ」

由衣「私、もうここ来ないから」

河合「え？」

由衣「この家無理だもん。同棲の件、考えといてね」

再びラップ音。

由衣「いやああああ！」

半泣きの由衣が逃げるように家を出る。

河合が慌てて追いかけていく。

誰もいなくなつた部屋。

アンジュ「ふふふ。作戦大成功。これはね、私のことを不気味だっていった罰なんだから」

○ 同・押し入れ（夜）

押し入れの中にいるアンジュ。

戸が開き、光が差す。

河合がアンジュを膝にのせる。

河合「ごめんアンジュ。俺が悪かったよ」

河合、目に涙をためている。

アンジュN「春人を見た時、胸が詰まりそうだった。こんな顔させたいわけじゃなかったの」

河合「もうこんなところ入れたりしない。だから、あんな彼女を怖がらせるまねはしないで」

アンジュN「春人が望むのは、髪が伸びる人形」ただそれだけだった」

アンジュM「ごめんね春人。もう二度とあんなイタズラしないよ。だから、まだあなた

のそばにいさせて」

○ 同・リビング（朝）

春人が布団を畳んでいる。すると、スマホに由衣から電話がかかってくる。

河合「もしもし？」

由衣の声「おはよう、春人」

河合「おはよう」

由衣の声「昨日、あの後大丈夫だった？」

河合「うん。今のところ何も起きてない」

由衣の声「そっか。……もしかして、取りつ

かれてたのはあの部屋じゃなく由衣だっ

たとか？」

河合「それは違う……と思う。ほんとは心当

たりあるんだ」

由衣の声「……あの、髪の毛の長い人形？」

河合「押し入れにしまったのがいけなかった

んだと思う。ごめん。怖がらせて」

由衣の声「（ボソボソと）捨てに行こう」

河合「えっ？」

由衣の声「明日、一緒に捨てていこう？ 神

社に持っていったら人形供養してくれるよ」

河合「……」

×

×

×

河合がアンジュの髪を切っている。

アンジュN「春人はもう話しかけてこなかった。きっとこれが最期のカットになる。春人から私への冥土の土産」

○ 同・同（朝）

スマホのアラームが鳴る。午前九時。

目覚めた河合がアラームを止める。

ゆっくりと体を起こす。

ふと、椅子に座るアンジュを見ると目を

見開く。アンジュの髪がボブヘアのま

まになっている。

そばに行く河合。アンジュを抱きかかえ

て髪に触れる。その時、スマホが鳴る。

河合「（電話を取り）もしもし」

由衣の声「おはよう、春人」

河合「おはよう」

由衣の声「今日神社に十一時集合でいい？」

河合「……あーごめん、実は起きたら熱あつてさ」

由衣の声「えっ。大丈夫？」

河合「うん。でも念のためこれから病院に行きたくて。悪いんだけど神社はまた今度でもいい？」

由衣の声「もちろんだよ。お大事に」

河合「ありがとう」

○ 道

河合がバイクに乗っている。

○ アンティークショップ・店内

河合が紙袋を持って店に入ると、奥から店主の風間洋介（ユヰ）が出てくる。

風間「いらっしやい」

河合、紙袋からアンジュを出す。

河合「すみません。この人形引き取っていた

だけたりしませんか？」

風間 「引き取り？ 買取じゃなくて？」

河合 「……引き取りでお願いします」

風間 がアンジュを受け取る。

風間 「フランス人形だね。髪が短いなんて珍しい」

河合 「昨日まではロングだったんですけれど、何故か今日は短いのがいいみたいで」

風間 がポカンとしている。

河合 「すみません、今のは忘れて下さい」

風間 「……さては、失恋でもしたかな？」

河合 「えっ」

風間 「冗談だよ」

河合 「あっ、アハハ」

風間 「どうしてうちに来てくれたの？」

河合 「……本当は人形供養に行くはずだったんです。でも今朝、自分でもよくわからないんですけれど、人形の意味を見たような気がして。連れて行けませんでした」

風間 「人形に魂が宿ることは珍しくないから

ね。君のその優しさに、この子も惚れたんじゃないかな」

河合「からかわないでください」

風間「ははっ、すまない。それじゃあ引き取らせていただこう。うちにはもう一体フランス人形がいてね」

河合「そのショーウィンドーの子ですか？」

風間「うん。名前はルイス。美形だから店の前を通る客が足を止めてくれるんだよ。さて、新入りの名前はどうしよう」

河合「アンジュ、です」

風間がアンジュを見詰めて微笑む。

風間「大切にされていたんだね。それじゃあ、

アンジュはルイスの隣に並べよう」

風間がアンジュをショーウィンドーに飾る。

アンジュN「そして、ついにやってきた別れる時。きつともう二度と春人に会うことはできない」

○ 同・前

店を出る河合。

風間も見送りのため外に出る。

風間「ありがとう。ルイスに友達ができてよ  
かったよ」

河合「こちらこそ。アンジュも喜んでと思  
います」

風間、駐車場のバイクに気付く。

風間「今日はバイク？」

河合「はい」

風間「ブレーキランプが光ってる」

河合「え？」

河合、振り向くとブレーキランプが五回  
刻みで光っている。

河合「……」

○ 同・店内

ショーウィンドーに並ぶアンジュとルイ  
ス。

ルイス「ねえアンジュ。君が送った最後のメ

ツセーじは彼に届いたと思う？」

アンジュ「わかんない。：：私にわかるのはこの恋は終わったってこと」

ルイス「そっか。：：ねえ、もしよかったらさ、君のホントの姿を僕に見せてよ。お気に入りに入りなんでしょう？ 長い巻き髪」

アンジュ「ルイス、残念だけどそれはできないわ。私の一番のお気に入りはこのボブヘアーだから。この先一生変えるつもりはないの。私の初恋の大切な遺産だからね」

へ了へ